

ナマステ

特定非営利活動法人
自然文化誌研究会 会報誌



特別号の2

2020 年 6 月 10 日発行号

コロナウィルスによる影響が続いております。「こすげ冒険学校」についても、5 月 15 日の時点で開催の見合わせを決定しました。コロナウィルスの収束を待ちながらも、冒険学校を支えてくれる大学生、社会人スタッフの8月の予定が厳しくなっていることが既に分かり、残念ながら中止の決定です。

こんな状況ですが、生きた言葉が寄稿として届いていますので、WEB 版の特別号の 2 として発行しました！！
(事務局 黒澤)

まーしー（新潟県三条市 横山昌佳）より

最近、俳句を嗜んでいる。いつでも、どこでも詠めるし、レシートの裏にも残せる。お金も掛からない。下手でもまァ別にかまわないし、コレハと思うものができれば、その日一日いい気分であられる。

さて、バード・ウォッチングには双眼鏡があればいいし、ひのきの棒があれば冒険に出られる。俳句には歳時記である。これには季節ごとの言葉とその意味、用例が載せられていて、ばらばらとめくっているだけで楽しい。

先日、この歳時記をめくっていたら、「まくなぎ」という語を見つけた。夏の小菅村で、目の周りにやたらと寄ってくるアレである（はるちゃんは目虫と呼んでいた）。この「まくなぎ」の語から、まざまざとあの川辺が眼前に蘇ってくる。はねる水しぶき、木漏れ日、ヤマメの背、ぐっしょり濡れたTシャツを日光と焚き火でじわじわと乾かすあの真昼……

まくなぎも眩しさ思ふよすがとし

〇2020 年の活動予定のお知らせ

※ 開催できるとよいのですが・・・開催と中止について検討しています。一つずつ決めていきます。

9/26-27 『INCH まつり』 @小菅村 日帰り or 1 泊

12/26-28 『冒険学校 まふゆのキャンプ』 @小菅村 2 泊 3 日



ナマステ 特別号 の2

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌
＜発行日＞2020 年 6 月 10 日

＜編集＞自然文化誌研究会 事務局

＜発行＞ 特定非営利活動法人

自然文化誌研究会

The Institute of Natural and Cultural History

＜事務局＞〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2

TEL：0428-87-0165・090-3334-5328（事務局黒澤）

E-mail：npo-inch@wine.plala.or.jp

H P： <http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>

八丈島探検記～本編①

賛田隼人 （だにえる）

お元気ですか、だにえるです。僕は元気です。なかなか思い通りにならないご時世ですが、できることを少しずつでもできたらなと思います。そんなわけで、八丈島探検記本編で少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

1. 敵は暑さとアンダーパス

八丈島の綺麗な景色！からは始まりません。旅行の始まりは玄関からです。アパートから竹芝桟橋への約40キロ程度の道のりで、楽しいところは特にないのですが原付旅をおすすめする手前、どうしても書いておかななくてはいけないことがあるのです。

それは、暑さ対策と都心のアンダーパスについて！原付もバイクにも乗らない人は読み飛ばして大丈夫です。夏に原付を乗る場合でも、安全性を考えると長袖長ズボン必須です。メッシュ素材や接触冷感の肌着などを活用すると思います。ワークマンにお世話になりました。それと、ちょっとした時間で水分補給ができるように水筒やペットボトルホルダーなどもあると思います。僕の場合はパニアバックについていたので、信号待ちをしているときに給水していました。もちろん、1時間ごとにコンビニなどに立ち寄ってしっかりと休憩をとるなどの対策も大事だと思います。不注意や体調不良で事故にあっては旅行や冒険どころではなくなってしまいますから。

暑さの話はこのくらいにしてアンダーパスの話します。ここで僕が話題にしたいのは、都内などに見られる交通量が多い道路の交差点や信号を回避するためにあるようなアンダーパスです。だいたい2輪通行止めになっているように思います。これにうっかり入ると2点減点と5000円（原付以外は6000円だそうです）の反則金。これから原付やバイクに乗ってみようかなと思う人がいたら気を付けてください。



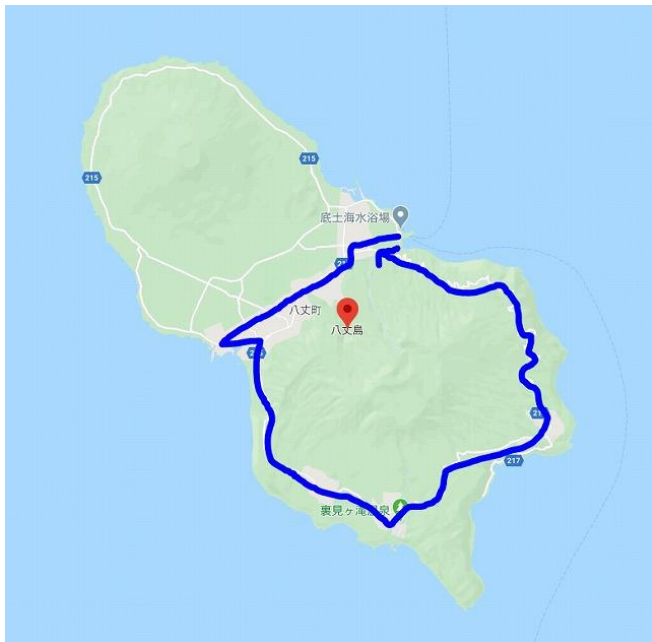
さて、そんなアンダーパスを避けるために、道を逸れ、交差点に捕まり、アンダーパスを通過してきた車と合流し、また避けるために道を逸れ…。と、繰り返してへろへろになって竹芝桟橋へと向かいます。二段階右折できない道路があって、あたふたして赤信号に突っ込んでいきそうになったところを警察の人に呼び止められるなんてこともありまし

た。捕まえたりせずに教えてくれて、良い旅をなんて見送ってくれる心温まる出来事もありましたが無事に到着できました。

2. 両手にパニアとヘルメット

船の出発は22時30分ですが、暑さや道路が混む前にと早めについたのでしばらく時間がありました。東海汽船のロッカーに荷物を入れて、リトルカブは近くの駐輪場に置いて、喫茶店などで涼むことに。40キロ程度の距離でも、結構しんどかったのもうビールでも飲んでしまいたかったけど、駐輪場から動かすときにまだ乗るので我慢…。20時前にリトルカブと一緒に東海汽船へ戻り、事前に予約してあったのでスムーズに乗船券の発行とリトルカブの預け入れができました。原付などの受け付けは、必ず事前予約をしておかななくてはならないので要注意です。それと、パニアバックのようなバイクにつけておくタイプの荷物は、ヘルメットだろうとRVボックスだろうとなんだだろうと外すように言われるのが不思議です。つけたままだと追加料金を請求されるので、外して手荷物として乗船します。お互い得しないと思うのですが、このきまり…。

あとは時間まで待つだけです。8月中旬だったので、家族連れのお客で待合所も賑やかでした。22時30分、予定通り八丈島へ向け黄色の船体が鮮やかな橋丸で出航しました。レインボーブリッジの下を通り、夜の東京湾を進んでいくのは二回目でもワクワクしますね。東京湾の中にいるうちは、船の揺れもほとんど気にならないので早めに寝てしまうのが良いです。朝方に三宅島、御蔵島に寄って8時50分ごろに八丈島に到着しました。



3. 旅の醍醐味は寿司と温泉

8月19日、八丈島1日目の朝は小雨でした。たくさんの手荷物に難儀しながら最後の方に下船しました。リトルカブを引き取りに向かうと、コンテナから出てきたところで、受け取ることができました。船の停泊している底土港からこれから向かう底土野営場までは近いので、簡単に支度を済ませて出発しました。

底土野営場に到着して、真っ先に目に入ってきたのは真っ赤なハイビスカスの花。南の島に来たんだなぁと実感させられます（東京都ではあるんですけどね、八丈島…）。滞在しているキャンパーたちは5組程度、リトルカブが近くに置いて、風が気にならない場所を探します。下船したのは最後の方でしたが、到着したのは1番だったので、好みの場所を探す余裕がありました。小雨が降る中での設営だったので、グラウンドシートとフライを先に張って、作業を進めました。100均のレジャーシートが設営が済むまでの荷物置きに活躍してくれました。割り切って使える道具があるというのは便利です。設営、コーヒー休憩の合間にお昼の予約を入れておきます。



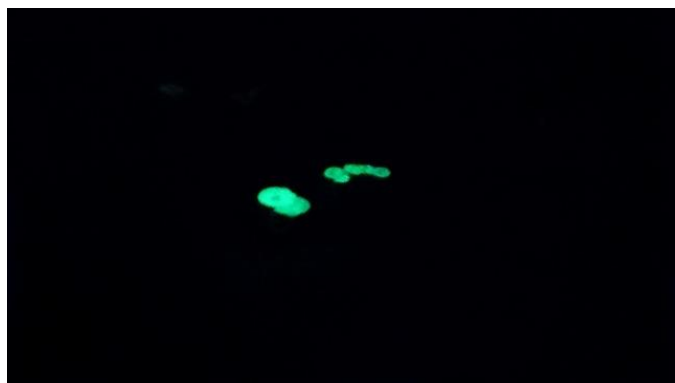
お昼までに時間が少しあったので、ビジターセン

ターに行くことにしました。広い植物公園の中にあり、八丈島の文化や自然について展示がしてあります。無料の施設とは思えないほど楽しめます。個人的には光るキノコの展示が好きです。



👉 光るきのこ発光前

👉 光るきのこ発光後



さて、旅の楽しみの一つといえばその土地の食事でしょう。予約を入れていたのは「すし処 銀八」。島寿司が目当てです。島寿司というのは、醤油漬けにした刺身を使った寿司で、ワサビではなく練ガラシを使うことが特徴の八丈島の郷土料理です。以前来たときはスーパーで売っているものしか食べなかったのですが、寿司屋のものを食べてみようと思っていました。一人前で2000円くらいしますが、食べるだけの価値はあります。メダイも美味しいですが、キンメが最高でした。旨味がギュッと詰まった身に、青唐辛子が効いた醤油がマッチしていてずっと食べていたい…。左上にある海苔のお寿司も初めて食べましたが美味しかったです。仕入れの量が多いのか、予約していないと断られてしまうようです。僕が食べている間も何組か来て断られていました。



お腹もいっぱいになったので、八丈島でツーリングを楽しんでいきます。今日は八丈島一周道路（正式には都道215号）の南側を走ります。これは八丈島の南北にそれぞれある八丈富士と三原山の、三原山を裾野をまわる道です。ひたすら登ったり登ったり時折下ったりしていきます。自転車ではないので疲れないですが、寄り道をたくさんしてのんびり回ります。

1か所目、「黄八丈 めゆ工房」。八丈島の名産、黄八丈を作っている工房と販売所が一緒になっています。予約をすると見学や説明もしてくれるらしいです。今回はぼーっと店内を眺めていくだけですが、絹糸を染めていく過程を説明する動画が流れていて、展示してあるものを見るだけでも結構楽しいです。小物類は手ごろな値段で買えますが、お店の奥に飾ってあった着物は900万円するそうで、それはもう見事です。機織り機が今でも動いているのでそういったものを見ることができるといっても貴重かもしれません。



2か所目、「裏見ヶ滝温泉」。観光地としては、裏見ヶ滝の方を紹介するべきなのだと思います。岩がえぐれていて、滝の裏側まで回り込んで見ることのできる遊歩道がある八丈島の観光名所です。裏見ヶ滝温泉は八丈島に7か所ある温泉施設の1つで、水

着着用で利用できる無料の温泉です。無料とはいえ、地元の方たちで綺麗にしてくださっているようで、とても快適に利用できるのでキャンプに来ている僕のような人からすればありがたい場所です。眺めもいいので1時間ほど滞在しました。余談になりますが、「TRICK-劇場版2-」のロケ地になっていいますので、見たことがある人は一層楽しめるかもしれません。



八丈島の有名なものとして、ポットホールがあり、その場所を探しながらさらに走っていきませんが、入り口らしきものを見つけたところで夕方になってしまったので次の日に回すことに。八丈ストアというスーパーで、6時半からお弁当類が半額になるので、そこで買い出しを済ませて野営場へ戻ります。

夕飯も済ませ、持ってきた本をしばらく読んで、それも飽きたので寝てしまおうと思ったのですが、蒸し暑くてちっとも寝れません。野営場を抜け、海沿いの遊歩道を歩いていると、明かりの少なさも手伝って、星がずいぶんと見えます。しばらく星を眺めてから、テントに戻るのですが、蒸し暑さは解消されず、結局日を跨ぐくらいまで寝付けませんでした。八丈島の熱帯夜にはキャンプ生活中、苦しむことになります…。(つづく)

結局戻ってきた地点は

事務局としてではなく、稚拙な一人の人間として 黒澤友彦

掃除をする心は雫さん（こすげ冒険学校村長の雫さんだよ）から教わった。20年以上も前になってしまった10代、東京学芸大学の1年生だった頃。通学していた実家を出て住み始めたのは学芸大学の側ではなく、学芸大学の中、サークル棟の冒険探検部の部室だった。5畳ほどの部室だった気がする。ただでさえ狭いの、そこに人が住んでいればもっと狭い。冒険探検部という仲間であったとしても共有スペースに住むことを選んでしまうのは迷惑だなと今は思う。あの頃は分からなかった。自分のことしか考えていなかったんだな。

週6の徹夜バイト。拝島橋のクロネコヤマトの集配センターで働いた。名目は冬山装備（一式）を購入するため、実際に購入した（その装備をもって、年明けに佐伯さんに北ハケ岳に連れて行ってもらう）。学費を出すためでもなく、生活費を出すためでもなかった。真の目的はそういった生活で（周囲に）認められたかったんだな。「俺は面白いことをしている」「俺は変わっている」・・・良い経験にはなったが、当時を思い出すと恥ずかしいものがある。

バイト明けの早朝、住まいの学芸大学に寒さに震えながら戻ってくる。コタツに入って寝ていると、同じく深夜のバイトから雫さんも戻ってくる。そして起こされる。よく分かんが部室の掃除だ。部室が終わると、同じフロアで共有している水場などのスペースの掃除だ・・・嫌々、不満、面倒、なぜ俺が・・・様々なネガティブな気持ちに包まれたが、未熟だった当時の俺に必要なことを雫さんは仕込んでくれたのだと、ある程度の美化も交えながら今は思うし、感謝の心もある。

よって俺は公共のスペースを汚さないし、掃除もできる。率先して落ちている空き缶、ペットボトル、ティッシュ（コロナウィルスの影響下にある今は危ないかも）、タバコの吸い殻を拾える人間に育った。同時に、無理な時は無理だと潔く諦め自分を責めないバランス感覚も身についたと自負している・・・なのだが・・・

この小菅村に本会が拠点を構えて15年が過ぎた。今は、キャンプ場が拠点であり、お借りしているから草刈りも便所（昨年から水洗）掃除も、ゴミの片付けもすべてやっている。だがそれ以前に借りていた古民家2軒では、使用方法が悪いということで大家さんから追い出されたというのが事実だったりする。

で、言い訳をするならば、「若さ」ということで、許してもらいたい。「若さ」ゆえ・・・眠い、酒を飲みたい、遊びに行きたい、人と集まりたい・・・ということで、掃除や片付けの優先順位は低い。今ならば、「脳汁」の出ない今ならば、掃除や片付けの優先順位はものすごく高い。当たり前のことだと実感している。現に、明日の仕事の段取り、そして服の用意まで前の晩に準備しちゃったりする。小学校低学年で習ったことだ。

掃除の技術はログビルダーから教わった。若狭さんを中心とするログビルダーチーム、そのメンバーは学校の用務の仕事をしており、その道のプロなのだ（ログビルドは趣味の方）。キャンプ場でのログハウス2棟＋トイレ棟、そして我が家の建築で、いろいろいろいろ教わった。掃除だけでなく手入れやメンテナンスまで。

結局のところ、掃除や片付けは基本なんだと思う。小中学校に通っているみんな！！遊びも勉強も部活も恋もゲームも全部大事なんだけど、将来大切な基本的な事柄として、掃除はできたほうがいい。掃除を嫌がらずに率先してできる人間である方がいいと思うぞ。掃除をマジメにやることは決して恥ずかしいことではない。茶化す奴はタコだ。タコに失礼だな。茶化す奴の方が間違っているというか・・・「幼い」でいいや。

小学生のころ毎日机に椅子を逆さまに載せて、教室の後ろに下げて、ホウキで掃いて水拭きして、今度は机を前に出して・・・というのが結構鮮明に思い出しちゃったりしている。

近々、神奈川県藤野町（現相模原市緑区）から小菅に本の移動を行う。本をトラックに積んだら、本のあった場所を当然掃除する。

昨年末は学芸大学に通って、冒険探検部の部室を空けるため、荷物の移動と処分、最後に拭き掃除までした。

先週末は、GWも夏休みも冒険学校をしないけど、キャンプ場の草刈りをした。

倉庫を植物と人々の博物館の図書室として借りているんで、毎年お盆とお彼岸には人のお墓の草むしりと掃除をする。家賃の代わりに労働で支払っている。

掃除が関係性を繋ぐ重要な仕事だったりして、年とともに丁寧に前倒しでできるようになったが、掃除をする心と技術を教えてくれた人たちに感謝している。40代になって巡り巡って戻ってきた地点は、小学生時代に習った社会で生きていく上での当たり前の事だったりもする。

でもね、「脳汁」が出ない近況、田舎暮らしで切羽詰まっていない近況なので、「規則正しく」する余裕があるからしているんだよね。「規則正しく」しておくことで、常に時間の余裕があり、その目的は「育児」。来月からは妻が勤めに復帰するので、保育所にも預けず、親戚も居ない中で日中は基本的に一人で育児をするから、「脳汁」とか「楽しみ」と距離を置いている。敢えての思考停止だ。両立できるほど鍛えられてはいない。

「規則正しく」明日の準備をすることも大事。小さいうちはそうかもしれないが・・・でもね、俺として褒めたいことは、若者は、眠らずに何かに没頭するぐらい熱くあるべきだ・・・と思ってもいる。

「もっと熱く生きるべきだ」

小菅村の近況

コロナウィルスの影響により、小菅の湯、道の駅など各施設が休業となっていた。6月1日より、小菅の湯も営業を開始した。

そんな中で、5/31に村長選挙と、村議会議員の補欠選挙が行われた。ダブル選挙は小菅村で初になる。前回の選挙は、2012年の村長選挙で、投票率は96.48%だった。



NHKの甲府放送より。同じ地区の方も村議会議員に立候補したので居ない際に記念撮影。村議会議員は3人のところに2人が立候補。

5月26日に公示日。そこから5日間の選挙戦。人口718人の小菅村ではみんなそれぞれの顔を知っているから、選挙ポスターは掲示されない。だが、選挙カーは小菅村内を走った。

誰に投票するかを真剣に考えつつも、一方を応援するということをしなかったのも、選挙事務所、出陣式などにはすべて顔を出さず（すべて顔を出すか、すべて顔を出さないかのどちらかとした）。

両陣営に普段からお世話になっている人が別れており、声が掛かるのでどうしても息苦しい感じで、終ってホッとしているのが本音になる。

そして選挙の結果は・・・

小菅村長選

開票率 100%

20時42分 発表

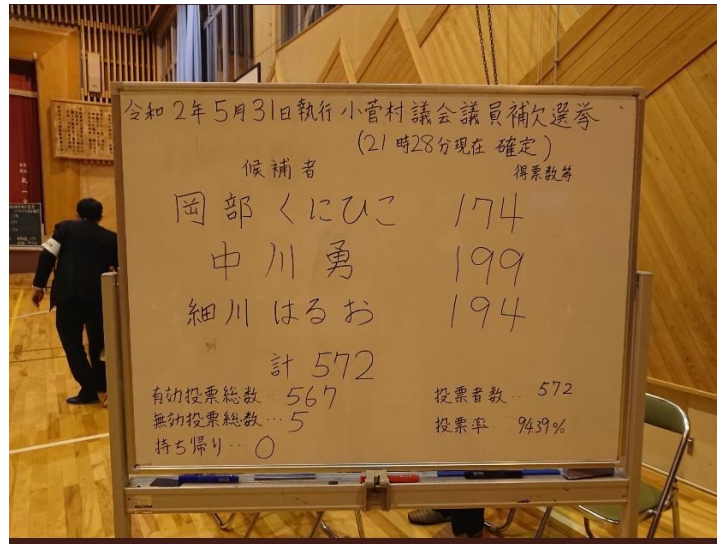
5月31日投開票
定数1

当  **松木 直美**
62=無現 285票
[略歴](#)

 **加藤 和秀幸**
70=無新 283票
[略歴](#)

投票率：94.39%
投票総数：572
無効：4

当 は当選、**確** は当確。開票状況は、1分間隔で自動更新されます。



(写真は開票に立ち会った村人のツイッターより)

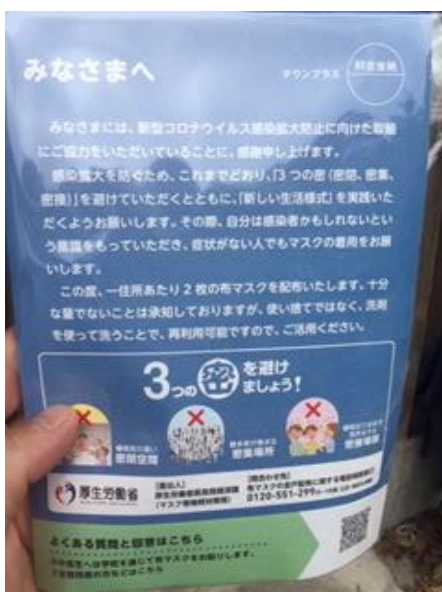
村長選挙は、たったの2票差だった。一人が逆に入れたら、同点票となりくじ引きで決着がつくようだ。投票率は前回より2.09%下がったようだ。

村議会選挙も、写真のとおり拮抗した選挙となった。

都内で教員をしている友人に話したところ、「中学校の生徒会選挙くらいの規模っすね」とのこと。

ということで、「1票の重み」は身をもって感じる事ができた。

選挙翌日の6/1。昨日までの熱気は一気に静まり、いつもの小菅村に戻った。そんな中・・・



アベノマスクが届いた。

Adventurous TOKYO CRUISE

文・写真 宮坂朋彦(みややん)

1. 東京をクルーズする

東京という都市をめぐるのは、大自然の中を散策するのと同じくらい冒険的だ。

一口に東京といっても、23 区の内と外では全く空気が違うし、23 区のなかでも街によって特徴が全く異なる。



↑ 以前、浅草で遊んでいたらミーアキャットを散歩させている人がいた。ペットのクセがすごい。

例えば、上野公園を拠点に東へ進めば、食器や道具の間屋街である合羽橋を通り、さらに少し足を伸ばせば浅草、ホッピー通りで一杯やって、頑張ればその先、スカイツリーまで堪能できる。

あるいは上野から南に下れば、アメヤ横丁の叩き売りを横目に、湯島天神にお参りをし、楽器のまち御茶ノ水や、電気街とオタクのまちで有名な秋葉原へ。さらにそこからひとつ隣へ行って、古本とカレーのまち神田・神保町、そして東京ドームと小石川後樂園へと、街の個性が目まぐるしく移り変わるのを楽しめる。

一つ隣の駅へ行くだけ、一つ違う道を通るだけで、異国に迷い込んだかのようなエキゾチックな空気が味わえるのだ。

区外は区外で、東京のイメージを覆す景色を見せてくれる。

のんびりとした空気の流れる畑と、苺やとうもろこし、野菜の直売所。のどかな河原は、区部とは時間の流れが違うかのようだ。北海道で生まれたのち、物心ついてからはほとんど東京の郊外で育ってきた私にとっては見慣れた光景だが、地方から出てきた友人には「これ東京？」と驚かれる。

東京は千姿万態だ。
そんな東京の街を歩く。



↑ 我が家から徒歩 3 分。
東京も郊外はこんな感じだ。

別に歩きでなくてもいい。自転車でも車でもバイクでも電車でも、この街をクルーズ(巡航)してみる。都市という名の海に漕ぎ出してみると、キャンプとはまた違う冒険心をくすぐられる。

私はキャンプも好きだが東京の都会も好きだ。キャンプに行けない今こそ、自然文化誌研究会で、あえて東京の話をしてみたい。

2. 東京無人

1月、コロナウィルスが大きな騒ぎになる少し前。かの有名な恵比寿ガーデンプレイスにある、東京都写真美術館を訪れた。見たのは、写真家中野正貴さんの写真展『東京』。

(詳細は <https://topmuseum.jp/contents/exhibition/index-3612.html>。一部の写真は閲覧可)

偶然、中野さん本人が在廊し解説してくれる回に当たった。福岡生まれの中野さんは50年以上東京に住み、東京の写真を撮り続けてきた。今回の写真展は、その総集編とも言えるもの。中でも印象深いのは、約20年前の写真集「TOKYO NOBODY～東京無人～」からの作品たちである。東京のど真ん中の風景でありながら、正月やお盆などの早朝を狙うことで、一切人のいない写真を撮る試み。今思えば、コロナでの外出自粛を暗示していたかのようなのだ。



↑中野正貴さん(64歳)。
展示中の写真撮影は自由だった。

「風景の写真だけど、写っていない人間が主役」

深夜を除いて、東京都心の街並みが完全に無人になることはほとんどない。

中野さんは、あくまで日の出ている時間帯に完全な無人の写真を撮ることにこだわった。そこにいるはずなのに、写っていない。いるはずの人々がいらない写真たちは、見る人の「何が起きたのだろう」「どこへ行ったのだろう」という想像を掻き立てる。



↑「思わずサイン本を買う」
の図

想像は、東京クルーズに不可欠だ。街を歩くとき、よく勝手な想像をしながら風景を見る。さびれた料理屋や、誰が来るのかわからない場所にある喫茶店、古いブティック。そこにはどんな人が住んでいて、どんなストーリーがあるのだろう。

そして、これからどうなるのだろう。街は更新が早い。

中野さんの写真の中にも、20年前と今とでは様変わりしている場所がいくつもあった。銀座の写真(上記 URL から閲覧できる)は、1996年のもの(私が生まれた年だ!)。先日行ったばかりの銀座の街は、私が北海道でおぎやあと泣いているころ、こんな顔をしていたのか…! 知り合いの昔の写真を見たような、両親の若いころの写真を見たような。

そうか、今日私が見た風景も、もう二度と見ることはないかもしれないのだ。一期一会が、そこら中に散らばっている。あっちもこっちも気になってくる。次に来た時、この場所は果たしてどうなっているのだろうか?

美術館を出て上を見上げると、入る前に見たはずの恵比寿の街並みが、映画や小説のワンシーン、ゲームや漫画の一コマのようにどこか違って見えた。

3. 都市という自然

「自然は私たちの思い通りにならない」はよく聞く話だ。

その一方で、裏を返せば「人工物」なら思い通りになるというような、そんな傲慢さがあるように思えてならない。

東京という街を歩いていると、不思議と森の中を歩いているように感じることもある。

人が作り出したはずのビルの隙間から吹く風や木漏れ日に、人が意図したもの以上の何かがあるような。高層ビルから見た街の明かりが、富士山の上から見た樹海の景色に重なって見える不思議。

東京という街は、もはや作り出した人の手を離れ、一つの自然として息をしているように思えるのだ。



↑霧のかかる渋谷のビル。

この街は私たちにはどうすることもできない。

否応なしに変わり、動き、進んでいく都市のエネルギーは、大自然を前にしたとき感じる雄大さとどこか似ている。

境目なんてあいまいで、人間だって動物だ。

人間も自然の一部と思えば、東京という都市も、人という自然の生き物が作り出した第二の自然のようなもの。大自然のなかで、私たちに思い通りになるものなんてこれっぽっちもない。それを思い起こさせてくれるのは、何も豊かな森や川や海の方ばかりではない。



↑六本木の森ビルから。

写真が趣味なわけではないので撮影技術はお察し。それでも、最近のスマホはすごい。

そう思って街を歩くと、どこか謙虚な気持ちになってくる。私はこの街について、知っているようで知らないのだ。

すると見慣れた風景が、未開拓の神秘へと姿を変える。ただの散歩が、冒険的な巡航になる。

そうだ、何でもない風景だけ。

一枚写真撮っておこうかな。

20年後を楽しみに。



↑ただの近所の道。

団地の字のフォントって、なんかいいよね。